

常任委員会視察報告書

委員会名	建設常任委員会 (中里委員長、保坂副委員長、高野委員、くりはら委員、森委員、松中委員、大石委員)
視察先 調査事項 など	<p>1 無電柱化の推進に向けた取組について (石川県金沢市)</p> <ul style="list-style-type: none">令和6年(2024年)10月24日(木)14時00分～15時30分説明者:金沢市 土木局 道路建設課 無電柱化推進室 <p>2 ウォーカブルなまちづくりについて (富山県富山市)</p> <ul style="list-style-type: none">令和6年(2024年)10月25日(金)10時30分～11時30分説明者:富山市 活力都市創造部 都市計画課
視察先 概況	<p>1 金沢市の概況</p> <p>金沢市は本州のほぼ中心に位置し、明治22年(1889年)の市制施行以来、近隣町村との度重なる編入・合併によって市域を拡大し、平成8年(1996年)には中核市に移行しました。</p> <p>金沢は加賀藩前田家の城下町として栄え、加賀友禅や金箔、九谷焼などの伝統工芸や、能楽や加賀万歳などの伝統芸能が受け継がれてきました。</p> <p>また、戦災や大きな災害を免れたため、藩政時代からの美しいまちなみが現在でも多く残っており、金沢市の貴重な財産となっています。</p> <p>当委員会では、都市防災機能の向上や安全かつ円滑な通行の確保、良好な都市景観形成のために必要な取組である、「無電柱化の推進に向けた取組」について視察を行うとともに、無電柱化事業が行われた、主計町茶屋街及びひがし茶屋街の現地視察をあわせて行いました。</p> <p>2 富山市の概況</p> <p>富山市は富山県のほぼ中央から南東部分までを占め、北には豊富な魚介類を育む富山湾、東には雄大な立山連峰、西には丘陵・山村地帯が連なり、南は豊かな田園風景や森林が広がっています。</p> <p>また、全国的に「くすりのまち」として有名で、富山に根付いてきたアルミやガラスなどの産業は、売薬事業にルーツがあるものが多くあります。</p> <p>近年は環境、バイオ、IT関連産業の育成に努めるとともに、立山連峰や越中おわら風の盆といった観光資源をいかした、観光産業の発展にも取り組んでいます。</p> <p>当委員会では、地域住民や交通事業者、行政などの関係者とともに、交通結節機能の強化や住環境の向上などの都市基盤整備を通じ、活力と魅力あるまちへと再編するための取組である、「ウォーカブルなまちづくり」について視察を行いました。</p>

1 無電柱化の推進に向けた取組について（石川県金沢市）

市が無電柱化を進めていく目的には大きく「通行の安全」「景観」「防災」の観点がある。その中でも金沢市では美しい「景観」を残していくという事を軸に国、県と電線管理者の協力を得て整備を行なってきた。幸い戦禍に遭わず歴史と古き良き街並みが残っていた事も事業遂行上大きな理由となる。

しかしながら「無電柱化」には多額な費用と時間がかかるが金沢市では「金沢方式無電柱化」を掲げ、裏配線・脇道配線や軒下配線など低コスト短期間施工に取り組んでこられた。ただし軒下配線に関しては各家（店舗）の軒下を電線で繋げていくという「沿線住民の協力・合意形成」無くして成し得ないチャレンジを行い見事な施工となっている事を確認した。

この様な様々な手法を組み合わせた結果、金沢市民にとって誇り高い美しい街並みの保全、通行の安全、災害発生に備えた安心なまちづくりとなっている。

また市内各地には多くの外国人観光客が見受けられ、北陸新幹線開業に伴うだけではなく、観光客誘致にとっても「無電柱化による魅力あふれるまち・金沢」の取組が功を奏している事も市役所での説明、現地視察を通して確認することができた。

2 ウォーカブルなまちづくりについて（富山県富山市）

富山市が「ウォーカブルなまち」に取り組むきっかけとしては広大な面積を持つ地方都市で見受けられる車移動での生活がベースとなっており、車がないと自由に移動ができず30年後に生き残れないと2002年当時の市長が問題意識をもち「コンパクトシティ」を目指した。その一環として公共交通を発展させ「ウォーカブルなまち」が実現している。

市中心部や市内に計画的に張り巡らされた公共交通沿線には公園や緑道が点在し、歩行者専用エリアも多くあり買い物や飲食、イベントなども楽しめる環境が整っていた。

具体的には、幅広い歩行車道や自転車道の整備、行政計画による居住エリア誘導への助成制度、公共交通機関利用促進への助成制度、デジタルを活用した健康増進企画など多岐にわたった施策が市民に理解をされている事が効果測定もされ数値にも現れている。

市役所でのレクチャー後に実際に町中を歩いても、歩道の幅が広く、周囲の景観も楽しみながら快適に移動する事ができた。休憩スポット（ベンチなど）も充実しており歩行者に優しい設計が市内に施されていた。

視察時の印象としては約20年前に問題として掲げられた計画を分野横断で着実に取り組み、広く市民にも理解されている事を確認した。

中里成光
委員長
所感

保坂令子
副委員長
所感

1 無電柱化の推進に向けた取組について（石川県金沢市）

金沢市は、2009年1月に歴史的風致維持向上計画の第1号に認定され、同年「金沢方式無電柱化推進実施計画」を策定しました。計画の内容は、「まちなか区域」の約860haを無電柱化を推進する重点区域とし、「景観・歴史」、「観光・商業」、「安全・安心」のまちづくりの観点からゾーニングを行い、まちなみの特徴を生かした様々な整備手法を採用した無電柱化を進めるものです。

地中化による手法としては①完全地中化方式 ②既存ストック活用 ③浅層埋設 ④ソフト地中化が、地中化以外の手法としては ⑤軒下配線 ⑥裏配線・脇道配線 があり、まちなみに適合した多様な整備手法を採用しているのが大きな特徴です。

市役所で道路建設課無電柱化推進室長らから説明を受けた後、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）の主計町茶屋街とひがし茶屋街を視察しました。

地区としてまとまりを持った歴史的まちなみが素晴らしく、無電柱化がまちなみの魅力を高めていることがよくわかりました。無電柱工事後の「修景」にも配慮が行き届いていることが印象的でした。

視察にあたって最も知りたかったのは、「大地震で埋設管が損傷する被害が生じた際のインフラ復旧は難易度が高いのではないか」ということでした。これに対し、

- ① 無電柱化事業では、管路や特殊部に被害が生じた際の復旧は、基本的に道路管理者が行うこととなり、復旧に向けた調査についても、地中埋設のために時間を要する可能性はある。但し、管路の特殊部との接手部に地震時に離脱が生じないよう十分な“差ししろ”を持たせ、伸縮接手構造として地震動を吸収できる構造となっていることから、能登半島地震でも被害は発生していない。
- ② 災害時の停電リスクが低く、電柱の倒壊で道路を塞ぐリスクが少なく、72時間以内の人命救助・孤立集落の防止・迅速な応急救急活動を確保する上では、無電柱化の効果は大きく、特に“緊急輸送道路”においては重要だと考える。—という説明があり、大変参考になりました。

2 ウォーカブルなまちづくりについて（富山県富山市）

人口41万人の富山市の面積は、全国の中核市で最も広い1,200km²です（鎌倉市の何と30倍）。富山市が2000年代の初めからコンパクトシティを目指したのは、「居住地密度が低く、市域の面積が広大で、車なしでは暮らせない都市だと30年後に生き残れない」という強い問題意識を当時の市長が持ったことに端を発しています。

▽財源を空洞化のおそれがあった中心地に投資し、「まちなか」に住民を誘導して行政サービスの持続性を確保する ▽公共交通網である「串」が駅や停留所から歩ける生活圏である「団子」をつなぎ、団子への移住を進めるために住宅購入やマンション建設に補助金を出すという「串と団子」政策を進める—というコンパクトシティ施策の中で、全国的に有名な公設民営による本格的LRT（次世代型路面電車）の導入も行われました。2020年には北陸新幹線の開業による富山駅の高架化で、南北一体的なLRTネットワークが実現し、市街地の分断が解消されました。

鎌倉市は市の面積が 40 km²とコンパクトであることから、今回の視察では、富山市中心部のウォークラブルなまちづくりについて知りたいと考えていましたが、市域の広い富山市では、市民が公共交通を利用してまちを歩き、出会いの場が広がり、まちの賑わいが生まれることを主眼としているようでした。2018 年からの取組みである「歩くライフスタイルの推進、『とほ活（富山で歩く生活）』は、健康づくりの部局ではなく、都市部局が推進しているそうです。

最もインパクトがあったのは、コンパクトシティ戦略が都市経営の長期的ビジョンの下での 20 数年間一環した取組みであることと、65 歳以上の高齢者を対象に市内各地から中心市街地に出かける公共交通利用料金を 1 回 100 円に割り引く「おでかけ定期券」（バス片道料金 1,200 円でも 100 円）の制度を運用していることでした。

1 「無電柱化の推進に向けた取組について」(石川県金沢市)

1日目は、金沢市役所を訪れ、説明を受けたのち、実際に無電柱化を進めている主計町(かずえまち)などの現地視察を行いました。

無電柱化にはメリット・デメリットの両面があるわけですが、金沢市では近年、インバウンドによる賑わいがあるなかで、まちづくりに不可欠な課題として明確に計画上、位置づけられています。それは道路建設課のなかに「無電柱化推進室」を設置して専門的に取り組んでいることに表れています。

金沢市は中核市であり、鎌倉市とは規模が異なりますが、本気で取り組むのであれば、あれこれの問題以前に機構上、きちんと位置づける必要を痛感しました。一言でいえば、本市とは「本気度」が全く違うということです。

そのうえで、茶屋街には狭隘な道もあり、地中化が困難なところは柱に機器を設置する「ソフト地中化」や「軒下配線」など「金沢方式」と呼ばれる工夫を講じながら、現在も事業を進められており、学ばされました。

推進体制として、市民や学識経験者、電気事業者と国・県・市による「推進委員会」を設置して意見調整を図りながら取り組んでいることも重要です。本市も深沢整備用地だけを具体化した条例化ではなく、既存市街地を含む鎌倉のまちづくりを本気で進める姿勢で、無電柱化を進めるべきと再認識した次第です。今後の議会活動に活かしていきたいと思います。

高野 洋一
委員 所感

2 「ウォークアブルなまちづくりについて」(富山県富山市)

2日目は、富山市役所に伺い、同市の都市計画課から詳細な説明を受けました。富山市は自動車保有数が全国3位と車に依存した生活スタイルの一方、高齢化のなかで「交通弱者」が増加しており、車がなくても生活できるまちをめざして、複数の拠点集中型(一極集中型ではない)による「公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり」に取り組んでいます。

1. 公共交通の活性化、2. 公共交通沿線地区への居住誘導、3. 中心市街地の活性化という柱で進められており、居住の誘導は規制ではない「誘導型」であることが特徴です。市内電車や路面電車の改善を図るほか、郊外の地域には住民主体のコミュニティバス、さらに困難地域には市直営の支援も行っているとのことで、まちづくりの視点が明確であることが重要です。

そのことは、65歳以上を対象にした郊外⇄中心市街地の公共交通料金を一律100円に割引する「おでかけ定期券」制度に表れています。対象者の25%が利用しているとのことで市の拠出は年間1億2千万円。そのことの効果として「健康増進効果」(1.3億円)を調査し、きちんと根拠づけています。それを行っているのは福祉部局ではなく、まちづくり部局なのです。

鎌倉市も、まちづくりの視点で富山市の取り組みにも学び、真剣な検討を行うべきです。議会から特別委員会の意見も複数回出されているのですから。

1 無電柱化の推進に向けた取組について（石川県金沢市）

《金沢市役所→無電柱化された現地の視察》

金沢は非戦災都市で、藩政期からの城下町、武家屋敷、茶屋街、堀や用水などの土木遺構や歴史的遺産を含む街並みを後世に継承するため、昭和半ばから景観の保全を目的とした施策に力を注いで来ており、無電柱化はその一つである。防災機能向上の観点から、財源は引き続き国に強く要望して行く。

重点整備エリアの設定は「無電柱化推進委員会」に諮り、「景観・歴史まちづくり」「観光・商業まちづくり」「安全・安心まちづくり」の観点からゾーニングを行い、路線ごとに評価項目の点数を付けて整備の順番を付け、実施計画に反映している。能登半島地震の時に、無電柱化した所は停電が発生しなかった事から、防災効果は高いと考えられており、特に“緊急輸送道路”の無電柱化の役割は大きい。

電線管を埋設する空きや地上機器の設置場所が足りないという課題に対しては、地域住民への理解と協力を求めつつ、地中化以外の軒下配線、ソフト地中化、既存ストックを併用するなどして整備した。

《金沢 21 世紀美術館》

以前の市長の肝入りで作った美術館が、今や観光の目玉となっている。

《感想》

行政が市民と共に、向かうべき方向性を共有しており、一軒一軒を回って市民を説得して軒下配線を実現した現場を見て、行政職員の熱量を感じた。

2 ウォーカーブルなまちづくりについて（富山県富山市）

《富山市役所》

過度に車に依存した暮らしとまちの拡大により非効率なまちとなっており、インフラの維持管理やトラベルコストがかかるという課題が、人口減少と超高齢化により更に深刻化するという問題意識が有った。将来のビジョンを、一極集中ではなく多極分散型の『コンパクトシティ』とし、公共交通を繋いで充実させ、その沿線に居住・商業・業務・文化等の都市の諸機能を集積させる事等により人口誘導策を行い、地域拠点を整備し活性化させた。

公共交通は富山駅と中心市街地の回遊性を強化し、歩行者用の南北自由通路や南北一体的なLRTネットワークで、市街地分断の南北問題を解決した。交通事業者と連携し、ダイヤの適正化・列車増発で、利便性を上げている。

65歳以上の高齢者を対象として、市内各地から中心市街地へ出掛ける際の利用料金を、1回100円にする「おでかけ定期券」や、孫と市内の公共施設に来館すると入館料が無料になる「孫とおでかけ支援事業」は、医療費削減効果・地域経済効果・高齢者外出支援など、分野横断的な施策になっている。

《富山市立図書館（TOYAMAきらり）》

ガラス美術館と図書館が複合された施設。地域産業を支えて来たガラスを扱っており、市民が郷土や芸術・文化に触れられる場所でもある。

《感想》

「説明責任よりも説得責任」「エビデンスと一貫性」とおっしゃった市長の言葉を、しっかりと受け止めて行動する職員の姿勢が、衝撃的だった。

森 功一
委員 所感

1 無電柱化の推進に向けた取組について（石川県金沢市）

●主計町無電柱化事業

主計町伝統的建造物群保存地区

地区選定 平成 20 年 6 月 9 日

地区面積 約 0.6 ヘクタール

事業期間 平成 22 年から 23 年度

事業費 70,000 千円

●事業対象地区となった主計町の裏通りは極めて狭い路地で地中化方式による整備は困難であったが、重伝建地区の選定を受けた街並みは茶屋建築の建物が揃っていることから軒下配線の導入を検討。軒下が揃っている以外にも地権者の合意が得られたこと、建築物の建て替えの恐れが少ないことも軒下配線を可能とした。軒下配線の導入にあたって地域住民の同意がなければ実現しないため計画段階から住民、有識者、市によるワークショップを行い、理解を得ながら計画を行った。

●所感

軒下配線の導入は地権者と電線管理者、行政との協力が不可欠でありワークショップを重ねることで理解を深められたとのこと。結果、地中化よりもコストを抑えることができた。鎌倉市でも無電柱化事業実施に当たっては住民合意をどの様に進めるかが重要と感じた。

2 ウォーカブルなまちづくりについて（富山県富山市）

●富山市では公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくり「お団子と串の都市構造」を基本方針とし、①公共交通の活性化②公共交通沿線地区への住居誘導③中心市街地の活性化をコンパクトシティ施策の三本柱としている。

また、富山市は自動車保有台数が多く、過度に自動車に依存した生活環境となっていたため、平成 30 年に「健康づくりとまちづくりの融合」を掲げた富山市歩くライフスタイル戦略を策定し令和元年から市民向け取り組みとして「とほ活」を展開し都市アセットの活用や主要導線へのベンチ設置、歩くことを楽しめるイベントの実施といった街中の回遊性向上を図る施策を展開し、自動車に依存した生活から歩くライフスタイルへの転換を促している。

●所感

公共交通網を整備するだけでなく、交通事業者と連携し 65 歳以上の高齢者を対象に公共交通利用料金を 100 円に割引し高齢者の外出機会の創出を促している。また、孫と出かけると公共施設が無料になるなど外出を支援するメニューは鎌倉市でも導入を検討してもよいのではないかと感じた。庁舎跡地の整備について整備手法を慎重に検討すべきと考える。

松中健治
委員 所感

1 無電柱化の推進に向けた取組について（石川県金沢市）

金沢市議会で担当者から説明を受け、現地視察。

無電柱化の推進効果は「景観・観光」「安全・快適」「防災」に期待できる。伝統的建造物群保存地区の主計町茶屋街とひがし茶屋街は、歴史ある地区であり、木造建築物群であり、狭い路地であり、浅野川に沿い、景観的にも素晴らしく、観光客、インバウンドも多い。

私は地元、市、県関係者と「鎌倉若宮大路、小町通り」の電柱地中化に取り組み、実現した経験があるが、地元の理解、熱意が大切である。金沢市担当者の説明でも、関係者の覚書を取り成立が大変であったと感じた。

●金沢市の評価と視点

路線評価：まちの個性を磨き魅力ある都市景観、歴史的風情を向上させる効果が高い。活力と魅力を高め、賑わいを創出し、誰もが訪れ、歩きたくなる町並み形成効果が高い。無電柱化で地震等の電柱崩壊原因の緊急輸送道路の分断防止、電柱による死角を減らし安全確保の効果が高い。

事業評価：地域住民のまちづくりへの熱意が高く、実現の原動力となる地域のまとまり、公共への意識が高い地区として評価できる。金沢市や民間事業者が実施する事業周辺など、一体的に整備を進めることで無電柱化の整備効果が得られる。

2 ウォーカブルなまちづくりについて（富山県富山市）

コンパクトシティ施策を富山市議会で都市計画課担当から説明を受けた。コンパクトシティ施策の3本柱を理解することが重要。

- 1 公共交通の活性化
- 2 公共交通沿線地区への居住誘導
- 3 市街地の活性化

以上について詳細な説明を受けた。ポイントは以下のとおり。

- ・ウォーカブルなまちづくりを進める富山市。
- ・過度の車に頼らない公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり。
- ・既設の地方の鉄道網を利用したLRT事業が成功した。
- ・市街地の活性化が進み、人が集い、活気が街にあふれてきた。
- ・街には文化と芸術が融合するガラス美術館（隈研吾事務所企画）等が新たな顔になっている。

1 無電柱化の推進に向けた取組について（石川県金沢市）

金沢市は、人口 455,790 人 212,832 世帯の中核市で戦後の区画整理事業により道路交通基盤を含む都市計画施設の整備を行う中で、市内に 55 本ある用水路や堀、歴史的遺産（重要伝統的建造物保存地区）など、平成元年に制定された「都市景観条例」の中で「区分けの理論」により保全と開発の調和を図るゾーニングで明確化する手法で景観法に基づく金沢市における美しいまちづくりを目指して金沢城跡地を取り巻く重伝地区を指定し無電柱化の整備に取り組み、道路の有効幅員が広がり通行空間の安全性・歩道のバリアフリー化・大規模災害時の電柱の倒壊による道路の寸断防止を図ることを目的に 29 路線を対象に評価項目を設定し取り組んだとのこと。

今回は浅野川沿いの主計町重伝地区と東山ひがし地区 2 か所での完全無電柱化と地中化と軒下配線を引き回し、街灯などへトランス設置するソフト柱手法など現場での視察もさせて頂いたが、歴史ある建造物が並ぶ景観地区での無電柱化は、隣接する家屋への分電・トランスの設置場所・各家の費用負担など、指定された地区内の方々の余程の理解が必要で有ることを感じた。

無電柱化には国から 1/2 の補助があるとの事だが、緊急輸送路などが最優先されているために複数年で計画している事業には補助金がもらえない場合があることが課題であるとの事でした。

大石和久
委員 所感

2 ウォーカブルなまちづくりについて（富山県富山市）

富山市は、人口 404,870 人、185,491 世帯の中核市です。国交省の「居心地の良く歩きたくなるまちなか」の形成を目指し「ウォーカブル推進都市」の募集に手を上げるとともに、当時の市長が「多くの地方都市と同じく、車がないと自由に移動できないまちでは、30 年後に生き残れない都市の形の大胆な変革が必要」との考えからコンパクトシティ戦略による富山型都市経営の構築を目指し「公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり」と銘打ちこの事業に取り組んだとの説明でした。平成 14 年から現状の拡散式都市構造がなぜ良くないかを協議するまちづくり研究会を立ち上げ、平成 17 年の市町村合併による新たな課題にも対応するため公共交通の活性化と誘導的手法を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくりを目指すことにし、富山駅で南北に分断していた状況を歩行者用の南北自由通路の整備や公共交通事業者の理解を得て南北をまたぐ富山ライトレール（路面電車）を一体的に整備することで市街地の分断が解消され、グリーンスローモビリティの導入など歩きやすく回遊しやすい環境となっていた。

説明の中に事業に取り組むにあたり市長が自ら 120 回のタウンミーティングを実施。説明責任ではなく説得責任を果たすとの姿勢に感銘を受けた。将来を見据えたライフスタイルの変革を生む市民のためのコンパクトシティ（ウォーカブル）戦略でした。